秋田犬

作成年代　昭和9年(1934)
寸　法　13.6×9.0cm

秋田犬は、天然記念物に指定されている秋田県原産の日本犬です。大型のもので体高70cmに達し、立ち耳、巻き尾が特徴です。赤い紐を体に巻きつけて散歩をしているような場面が描かれたこの作品では、真っ白な秋田犬の毛並みがよく表されています。

雪べら

作成年代　昭和9年(1934)
寸　法　13.6×8.8cm

積雪地方で使われる鋤(すき)形の雪かき用具のことを雪鋤や雪べらと言います。粘り強くて軽く、折れにくいスギやブナ材が用いられます。この作品には、背景に顔のついた雪だるまが描かれています。雪かきで集めた雪に顔をつけて遊んでいたのでしょうか。

氷すべり

作成年代　昭和9年(1934)
寸　法　13.6×9.0cm

氷すべりとは、氷の上を滑る遊びのことです。スケートとも言います。スケートは明治時代中ごろに、仙台の五色沼で、外国人が子どもたちに教えたのが最初とされています。この作品では、氷すべりをする2人の疾走感がよく表現されています。

凧あげ

作成年代　昭和9年(1934)
寸　法　13.6×8.8cm

3月や5月の節句などに凧を揚げる行事を凧揚げと言います。凧揚げの多くは、初節句のお祝いや豊作を祈願して行われます。凧は、日本各地に広まって以降、豊かな郷土色を持ったものが数多く生まれました。

ボッチ

作成年代　昭和9年(1934)
寸　法　13.6×9.0m

ボッチは、はんてんやモンペなどと同じく、防寒具の1つです。被り物として用いられる帽子のことをボッチと言い、さまざまな種類があります。この作品については、左側の被り方をフロシキボッチ、右側をオコソズキンと言います。

勝平得之が描いた東北の人々

勝平得之は、生涯にわたって東北の人々の姿を表現し続けています。彼が描き続けた東北の人々とは、いったいどのような人々だったのでしょうか。彼の作品が掲載された柳田国男・三木茂『雪国の民俗』(養徳社、1944年刊)に書かれたある文章に、東北の人々の姿が端的に表現されています。

> 溢れる暖さを眼にたゝへ、静かな喜びを口もとに含み、そして牛のやうな粘りづよさを皺にきざみこみ、父祖から受けついだ逞しい精力を皮膚に光らせた顔。都会人がとつくに失つたものを、この人たちは根づよく持ちつゞけてゐる。これが日本人のほんたうの表情であらう。
> 農に従ふ精神は、国土と青人草とが一体となることであり、そのなかに無限の喜びを見いだすことである。(中略)
> 農に従ふ人たちの日常のくらしには、この喜びがいきいきと現れてゐるのである。(17頁)

この文章によると、東北の人々は、都会人が失った暖かさやたくましさなどを持っており、このような姿が日本人の本来の姿だと評価されています。そして、農業に従事する彼らは、国土と青人草(あおひとくさ、人民)が一体となることに喜びを見出していました。これが、勝平得之が描いていた東北の人々の姿だったと考えられます。

この図録で紹介している彼の作品の数々から、ぜひこのような姿を感じとってみてはいかがでしょうか。(文責：佐藤耕太郎)